
マテリアルゴーストS

オルメス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マテリアルゴーストS

【NZコード】

N1749P

【作者名】

オルメス

【あらすじ】

マテリアルゴーストの短編集です。都合により一部が原作と異なつてありますが、ご了承ください。

とある日の一人 蛍×鈴音（前書き）

書きたくなつたのでつい書いてしまつた。後悔はしていない。

とある日の一人 蟻×鈴音

- 蟻 side -

今日は新しいマテリアルゴーストも見つからないので、リビングでのんびり読みかけだつた本の続きを読んでいた。すると、絶賛恋人関係中の鈴音が遊びにきたので相手をしていると、急に鈴音が眞面目な顔をして言つてきた。

「ねえ、蟻。」

「何？」

「今日は何の日か憶えてる？」

「どうしたの、鈴音？」

「いいから答えて。」

「『』の前みたいに『蟻に初めて』『飯食べてもうつてから一ヶ月記念！』とかじゃないよね？」

「そんなんじゃないわよ。一年前にもつと大きなイベントがあつたじゃない。」

「あの時だつてまるで平安京に都が移つた年号を知らない人を見たような顔したくせに……。」

文句をいいつつもカレンダーを確認。……ああ、なるほど。ついでに
ばこの時期だつたな。

「僕と鈴音が出会つてからもう三年になるのか。」

「や、やだ。蟻つたら。ちゃんと憶えていてくれたのね。」

「…自分から振つておいて何を言つているんだか…。」

「何か言つたかしら？」

「いえ、何も言つておりません。鈴音様。」

「九二」

「あ、プレゼントなら用意しないからな。最近田村なんて気にならないことしかしてなくて‥。」

「…今日せんじは二回とじゅなくて…。」

「うん。黒い状態の鈴音の対応にも随分慣れてきた。付き合いはじめめた当初は鈴音の異常なまでの独占欲に肝を冷やしたものだつた。さすがに地元の幼児相手に公園で遊んでたら殺氣を感じたときはどうしようかと思つたよ。確かに女の子だつたけどさ。…ところで、こういう反応は珍しいな。何かあるんだろうか。

「む、ケイが私以外の女の子について考えている。」

ナビゲーション

」……。」

「ちょっと待つて鈴音話せば

「世に世に悔しる、唐変木！」

かに

自分の意思とは関係なく吐き出される息、徐々にフュードアウトしていく視界。…鈴音、いつも思つんだけど…。

「そのマテリアルゴーストを一撃で気絶させるパンチ力はどうかと思つよ‥。」

そうして僕の視界は完全に閉ざされた。

「…ママテコアアルゴーストを一撃で氣絶させるパンチ力はどうかと思つよ…。」

「あ、ちゅつと強…?」

…またやつてしまつた。お、女の子として好きな人に自分だけを見てほし…、と思うのは普通の欲求だよね!…強に言つたら「鈴音のはそんな可愛いものじゃないから」って言われそうだけど…。

「はあ。今日…ひやんと言わなことと思つていたの。いややつぱり恥ずかしいしでも言つたら喜んでくれると想つしまじやだつて言われたらど…ゼエゼエ」

…一人で息切れするまで長い台詞繰りて何がしたかったんだひつ。

「…ふう。」

深呼吸したら落ち着いてきた。…ここ一週間ほど言ひ機会を伺つていていたけれど、ついにこの日になつてしまつた。…言ひ場面を考えただけでも赤面してこるのが分かる。…さすがに恥ずかしきる。

「高校を卒業したことだし、良かつたら私の家と一緒に住まない?…なんて。」

改めてそこでノビてこいる強の姿を見る。…私はこんなにも悩んでいるのに、何で強は寝てこいるのだろう、とやつきの行動を完全に棚に上げて、額に滲み出でている脂汗を無視して怒りたくなつてくる。

「…ふう。…やつから深呼吸してばかりよね…。」

今度こそ落ち着いて蛍の顔を見る。

「……。」

思い浮かぶのは蛍と出会ってからの二年間。

「…ねえ、蛍。」

返事はないけど、構わず続ける。元より聞いてくるとは思っていない。

「まずは、私と出会ってくれてありがとう。蛍と出会って無かつたら、私は一生自分の靈能力にコンプレックスを持つたままだったし、この能力は人を守るためにあることを実感出来なかつたかもしれません。」

思い浮かべるのは、あの日、繁華街の中で満月を見つめて「死にたい」と呟いていた蛍の姿。つまらないことで私と口論している蛍の姿。大切な先輩のために血相を変えて助けに向かう蛍の姿。初対面の私を全面的に信用してくれた蛍の姿。「次に、私と一緒にいてくれてありがとう。」

一年と半年だけだったけど、蛍と過ごした学園生活。本当に、本当に色々なことがあつたけど、蛍はいつもそばにいてくれた。

「最後に、こんな私を好きになつてくれてありがとう。」

半年前、零音と名乗るマテリアルゴーストと私たちが闘っていた時、私は姉さんの制止を振り切つて（今では反省しています、はい。）、

その結果人生最大の危機を迎えた。でもその時に…。

「鈴音、少しだけ話を聞いてくれるかな。こんな、上空からゴム無しバンジーしてる時に言つのも変な話なんだけど…。前にユウに言つたことがあるんだよ。自分が死んでも、十日程したらさつさと忘れて、前へ向かおうと決意しちゃう、芯の強い女の子が好きなタイプだつて。でもね、鈴音。大切な人のためなら尊敬している姉の制止も聞かずに諸悪の根源に立ち向かっちゃう巫女さんも、僕の好きな、大切な人だよ。」

なんて言つてくれて…。思いが胸から溢れ、思わず声が出る。

「…ねえ、螢。」

「なんだい、鈴音？」

「うひやあー！」

・螢 side -

「…返事しただけなのに凄い驚かれよつだな…。」

「け、螢！いつから起きてたの！？」

「え？…さつきから深呼吸してばかりよね…。』のあたりから。

「ほとんど最初からじゃないのーー！」

頭を抱えて叫んでいる鈴音。それに対して僕は構わず声をかける。

「…そんなに恥ずかがらなくても…。」

「…え？」

「いや、キヨトンとされても困るんだけど。僕は、嬉しかったよ。鈴音がそんなにも僕のことを考えてくれていて。」

…おもじりこくらこ顔が真っ赤になつてゐるな、鈴音のやつ。…もつとも確實に他人事じやないだうつたど。

「あ、あのや、け、童。」

「なこ？」

「よ、よ、良かつたら、わ、私と、こゝ、一緒に住まひよこきやな

？」

緊張しながら、最後躊躇あくびつてゐるけど、何とか言つて切つたその言葉は確かに僕に届いた。

「…お言葉に甘えさせてもうひつかな。」

「じや、じやあー。」

…よし。とでも嬉しそうに満面の笑みを浮かべてゐる鈴音を見て僕も一つの決意をする。

「鈴音ばっかりに言わせてぢや不公平だからね。少し僕からもいいかな？」

「ど、どうぞ…。」

「鈴音。僕がこの世界にいるのはもつあまつ長くはない。それはいいね？」

「…そのことについては、うん、もう納得してゐる。」

「その限られた時間で、可能な限り君と伴に過ごし、幸せにすることを誓つよ。これは僕と君との『契約』だ、鈴音。」

「…うん…。」ひかりよひじくね、童…」

…コウへの思いが消えたわけじやないけど。自分で言つたんじやないか。複数の唯一無二が増えていくって。その事を思い出さず

てくれたのは間違いなく鈴音だ。…うん。だから、僕までいる。

「ああ、幸せだ…。」

とある日の一人 蛍×鈴音（後書き）

…どうでしたか？

こんな話を書いて欲しい、がありましたら感想の方へお願ひします。
…来たら、嬉しいです。

感想も、もちろんお待ちしています。

名前で呼んで 蛍×紗鳥（前書き）

aka あかさん、遊鬼さんよりリクエストがありました、**螢×紗鳥**です。中学のころの話です。

名前で呼んで 蟻×紗鳥

- 蟻 side -

「後輩、今週の日曜日は空いているな？そんな後輩に朗報だ。」

「…今度は何ですか、先輩？」

陽慈に頼まれて解決した野球部の「ざ」から数ヶ月が経った。あれ以来何故か僕のことを気に入つたらしく先輩・真儀瑠紗鳥とのよく分からぬ交友関係は続いている。

「」に商店街のくじ引きで当たた、近々オープンする遊園地のプレチケットが一枚ある。だが生憎と私にはこの手のことに誘えるような間柄の人間はとても少なくてな。」

「換金しちゃえばいいじゃないですか。」

「…可愛げの無い奴だな。こんな美人が誘つているところの」。

「先輩の場合、綺麗なバラには刺がある、つてレベルじゃないですね…。食虫植物みたいな感じですかね。」

あるいはラフレシア。…腐つた肉の臭いはさすがにしないけど。つてこれもハエ食べるんだった。

「…来ないのならある事無い事色々言い触らすぞ。」

「言い過ぎました。お許しください。」

「嫌だ、許さん。というわけで日曜日、9時に駅前集合だ。」

「ははは、行けばいいんでしょ。」

「『はい』は 2回で十分だ。」

「その無理数はどう再現すればよろしいんですかね…？」

「はいっ…4142135623…。」

「確かに 2だ！」

「馬鹿言つてないでさつと帰^モすの。何と聞つたって私たちほ
誇り高き帰^モ部だからな。」

「そつちから振つてきたんでしょ^ウがーーあと帰^モ部のビ^リで勝つを
感じうとーー。」

ともあれ行くことになつてしまつた。

…傘が煩そ^うだな…。
何で言い訳するかな…。

・紗鳥 side -

「少し早く来すぎたな…。」

現在の時刻は8時を少し回つた頃。つまり集合時間まで一時間近く
あるわけだ。…何故こんなにも早く来てしまつたのかは自分でもよ
く分からぬ^いのだが、来てしまつたものは仕方がない。

「まあ、のんびり待つとしよう。」

今田一田^一田^二ひつてつひつて後輩で遊ぶか、それを考えるだけで何時間でも
潰せるな、といながら考えることに没頭していった。

一時間後

「すみません、遅くなりました。傘がしつこくて…。
「なに、もう少し遅く来てくれても良かつたんだぞ。そしたら?
「そしたら?
「それを口實に色々と奢^うらせることが出来た。
「早くいきましょ^ウか。ここから意外とかかりますよね。」

：自然にスルーをしたな、こいつ。：いいだろう。そつちがその気なら、こっちにだつて考えがある。真儀瑠紗鳥の真骨頂、とくと味わうがいい！

「せ、先輩！？」

「照れるな照れるな。ただ腕を絡ませただけじゃないか。」

「…まさかこのまま一寸を過ごすとか言つんじやないですよね？」

「良く分かつてゐるじやないか。私と後輩は以心伝心、相思相愛だな。」

「僕から先輩へは『哀』ですけどね！」

「上手い。後輩、座布団一枚渡したいから買つてくれ。」

「何で誉められてるのにパシリさせられるんですか！-しかもその座布団遊園地に持つていくんですか！？」

「『遊園地』、『美人探偵』、『座布団』。これだけそろえれば何かが起こると思わないか？」

「何も起こつてほしくないですし、そもそもあなた探偵じゃないでしょう！-後、座布団は明らかに蛇足だ！」

そんなことを話ながら電車に乗り30分。そこから徒歩でしばらく歩くと、ようやく目的地が見えてきた。

「ほう、思つたよりも楽しめそうだな。」

「…どんなアトラクションがあるか調べずに来たんですか？-あ、僕には期待しないでくださいよ。」

「ん？-応調べたことは調べたんだがな。如何せん、まだ開いてない遊園地だろ？前評判とか分からなくてな。」

「なるほど。」

「心底どうでもよそうだな、後輩。」

「人の評価なんて当てにならないでしょ。先輩もよく知つてゐる

でしょう?「

「…確かに。」

私はそういったのが嫌で学校では猫を被つていいわけだしな。

「とにかく。折角空いているのだから、全設備制覇と洒落込もうか!」

「…先輩。さつきから日本語がおかしいですよ。用法はあってますが、洒落込むてなかなか使わないですよね…。」

・虽 side -

「さて、後輩。次はあれに乗ろ!。」

「…先輩、もう、無理です…。」

思わずその場に座り込む。疲労はピークに達している。

「何だ。情けないな、後輩。こんな事で疲れているようだつたら生きていけないぞ。」

「…ですがに過労死は遠慮願いたいですね。それにもう本当に無理です。だいたい、何でジヨットコースター3連発なんてハードスケジュールを消化しないといけないんですか?」

「文句が多いぞ、後輩。あと3つはコーヒーカップにしただらう?」

「『この私にかかるばコーヒーカップですら絶叫マシーンと化すことを教えてやる!』って言つて有言実行したのはあなたでしょ!…大きい声出したら気持ち悪くなつてきた…。」

「…仕方ない。少し休むとするか。」

そう言つて一人で近くのベンチに座る。ふう、やっと一息つける、

と思つたら、先輩が話始めた。

「…久し振りだつたんだ。」

「…？」

「こうやって誰かと気兼ね無くはしゃげる、つていうのが。」

「先輩はいつもそんな感じじやないですか。」

「これとそれとは、違う。たぶん、嬉しかつたんだと思つ。後輩と遊園地に来れたのが。」

…この人は本当に嬉しかつたのだろう。四歳で弟と離れ、小学六年の時に両親が離婚。それ以来幸せを求めてはいけないと自分を縛り付け、トライウマから何重にも猫を被つて生きてきた先輩は。……。

「さて、先輩。次は何に乗りますか？」

「もう大丈夫なのか？」

「…折角楽しいんですから、一秒でも無駄には出来ませんよね？」

口では愚痴ばかり言つていたが、僕だつて楽しかつたんだ。だから。

「先輩、こきましょ。」「…ああ、そつだな。次はあそこに見える…」

「また絶叫系ですか！？」「安心しろ。おそらく本日一番の敵だ。」

「それの何処に安心する要素があるんですか…だいたい…」

今は、目一杯楽しもう。先輩のためにも。自分のためにも。

- 紗鳥 side -

「これでだいたい回つたな。」

「やつですね。」

最初に田を付けていた所に全て行き… やすがに全部は無理だつたな… そこで時計が間もなく六時を指すとしてこいことに初めて気が付いた。… それだけ夢中になつていて、ヒツヒツヒツヒツ。

「では、これで最後としよ。」

「…やつぱり、あれですか？」

「ああ。定番だつて。」

そう言つて私たちは最終田的である場所・観覧車へと足を向けた。

「遊園地の締め括りは観覧車。雰囲気も出るしな。」

「そうですね。」

「」の観覧車は「」の一大メインの一つ（もう一つは豊富な絶叫マシーン。…だからあんなにあつた。）地域最大級の大きさ、だそうだ。だから一度乗つてしまつと10分近く拘束される…もつとも、それを苦に思つよつな人たちが乗るとも思えないが。

「」のゴンドラを降りたら終わりなわけだが、後輩。今日はまだつた?「

「休日なのに疲れが溜まつただけでしたね。」

「楽しかつただろ?」

「…そりやあ、そうですけど。」

「なら良かつたじやないか。」

「…。」

「…。」

会話が途切れてしまった。時計の秒針が一回りして、私はおもむろに口を開いた。

「何だが恋人同士みたいだな、私たち。」

「…先輩と付き合う自分の姿が全く想像できませんね。」

「地味に傷つくぞ、それ。」

「いえ、そうじゃなくて。」

「何だ?」「先輩のスペックがあれば僕なんかよりもっといい人見つけられますよ。」

「…もう一回言つてくれないか?テープレコーダーに入れて、からかいのネタにしたい。」

「それを聞いた後に『はい、よろこんで!』って答える人はいないと思いますよ。」

「渋々ならやつてくれるのか?」

「やりませんよ!」

「そうか。」

「そうですよ。」

「…。」

「…ツク。」

「…ツクク。」

『アハハハハハハハハ。』

思わず吹き出し、落ち着くまで笑い続ける。笑い終えたあと、顔を見合わせ微笑みあう。……。

「なあ、後輩。」

「なんですか、先輩?」

「私がこの空気に当てられたと思つて聞いてくれないか?」

「…初めての前振りですね。」

「私はこれでも感謝しているんだ、後輩。人と関わることを恐れたいた私を、後輩は変えてくれたと思っている。」

あの日、あの時。この「憎たらしい死にたがり」にあつていなければ私はどうなつていただろうか？想像するだけ無駄だが、きっとそのまま私はいつか限界を迎えていただろう。…陽慈には足を向けて寝れないな。何故かつて？

こんな素晴らしい友人を紹介してくれたんだ。感謝してもしきれないだろう？

「私はお前と対等でありたいと思う。だから、これからは…螢、と読んで構わないか？」

「…感謝しているのはお互い様なんですけどね。…と、もう降りなきゃいけませんね。…紗鳥。」

「…ああ、螢。」

この時私は間違いなく幸せだった。「こんな幸せがいつまでも続けばいい」とらしくもなく願つてしまつぜじこせ。

名前で呼んで 蛍×紗鳥（後書き）

…リクエストしていただくと、こんな感じになります。もし、リクエストがありましたら、感想、メッセージどちらでも良いので送ってください。

何もリクエストがなければ次は螢×深螺にあると思います。

感想お待ちしています。

クリスマスですから クリスマス企画（前書き）

今日（25日）の夜になってから突発的に書きたくなり、なんとか書きました。…ノープロットでやつた結果詰め込みすぎた気が…。

とりあえず、読んでみてください。

クリスマスですから クリスマス企画

「というわけで式見事。私からのクリスマスプレゼントです。」「はい？」

気が付いたら、田の前には深螺さんの顔のアップが。服をよく見たら…。

「ゴスロリ…。」

「萌えましたか？」

「…いや、まあ。意外性のある服だな、とは思いましたが。ところでここにはいつもやの共通の夢を見ている…みたいなあれですか？」

「よく覚えてましたね。」

「あれはトップクラス事後処理が面倒でしたからね…。」

思い出すのは色んなものを投げ付けてくるゴウの姿。今となつてはいい思い出だ。…いい思い出か？

「田頃の感謝を込めて、またやつてみました。」

「はあ。で、これがクリスマスプレゼントですか？…確かに、これはすごいですね。」

辺りを見渡してみると一面に広がる星、星、星。まさに天然のイルミネーションといったところか。…靈力による人工的な産物ですが。

「いえ、あくまでこれは舞台です。」

「じゃあ他にも何かあるんですか？」

「私の身体を。」

「…はい？」

今何とおっしゃいましたか」」の巫女さんよ。…おかしいな。「私の身体を」って聞こえたぞ。

「…すいません。もう一回こいついただいていいですか？」

「私の身体を。…何ですか？」…この台詞を女性の口から言わせたい願望でもお持ちなのですか？」

「無いですけど…」…理由は…聞きましたね…。僕には鈴音という彼女がいる身でして。」

「夢だからノーカンです。」

「…。」

「ちなみにコレゼントを受け取つてもひつまでは返すつもりはありません。」

「横暴だ！」

じわじわと迫つてくる深螺さん。まだ服を着てこるのが不幸中の幸いか。

「あ。そうですね。確かに服は必要ありませんね。」

考えてこらばから服を消さなごくへだて。…え。これ本当に…うじろと…

「…あ。」

「…今度は何ですか。」

「時間切れですね。」

「時間切れ？」

「はい。仕掛けるのが遅くなりすぎました。」

「いや、本当によかったです。そして早く服を着てください。」

「まあ、冗談は置いときまして。」

「冗談だつたんですか！？」

「本気の方が嬉しかつたですか？」

ぶんぶんぶん、と首を激しく横に振る。

「…そこまで激しく否定されると、さすがの私でも少し傷つくのですが。…本当は直接会つて渡すことができないので、その代わりにと思つてやつたのですが。」

「それはじ一寧にありがとひびきります。それがどうしてこんなことに？」

「あなたの顔をみたら思わずやつてみたいと思つてしましました。」

「へ？ それつて…。」

「では、メリークリスマス。」

そこで田が覚めた。…思い出して顔が赤くなる。…つづ、今日一日は大変なことになりそうだ。

・真儀瑠紗鳥の場合・

「後輩。クリスマスプレゼントだ。」

中を見てみると、そこには『魚扁の漢字が書かれた湯飲み』が。

「チヨイスおかしくないですか！？」

「他の人と被せたくないと思つたからな。」

「だからつてこれはないでしょ！？」

「見返りを要求する。」

「はいはい分かつてますよ。…えーっと先輩のは…こっちか？」

「ところで後輩。何人にプレゼントを用意したんだ？」

「今手元に残つてるのは一人ですけど郵送しちやつたのは…深螺に
サリーにアリス、綾と陽慈と家族分、ですね。」

「…ふーん。女ばっかりだな。」

「まあそうですね。はい、先輩。メリークリスマス。」

「これは…もしかしなくてもブレスレットだな。」

「はい。似合うと思つたので。」

「家宝にする。」

「身につけて利用してくれませんか？」

「…じゃあ後二つ欲しいな。觀賞用、保存用、布教用に。」

「三つあつても身につける選択肢は存在しないんですか！…あと頼
みますから布教はしないでください。」

「ふむ。まあ、一つで満足しておくか。後輩、ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

「うむ。」

「…。」

「…。」

「あれ？帰らないんですか？」

「後輩。巫女娘との会合は何時からだ？」

「午後6時に待ち合わせしてますけど…。」

「つまりそれまでは後輩をおいしくいただけるといつことだな。…

待て、何故逃げる？」

「逃げますでしょ、常識的に考えて…」

そこで先輩は急に真面目な顔をして、しばし躊躇したあと、意を決
したような顔の変化をした。

「…後輩。」

「何ですか？」

「私は愛人でもいいからな？」

「ブツ。」

思わず盛大に吹き出してしまった。…え?何ですか?今日はそういう日なんですか?…そうこうつ日ですね。クリスマスですものねー。

「…あの、先輩?」

「私は本気だからな。」

「…本気ですか。」

「それで、答えを聞かせてくれないか?」

催促され、落ち着くために一度眼を閉じ、そして考えを整理する。とはいいうものの、僕の気持ちは今年の夏のあの日から変わっているわけで。

「…めんなさい。」

「そうか。」

「…随分とあつさつしてるんですね。フツた僕が言つのもおかしな話ですけど。」

「答えは分かつてたしな。これは私なりのけじめみたいなものだ。」

「…。」

「それにな、後輩。そんなお前だから、私は好きになつたんだ。」

その告白に僕は思わず固まつてしまつ。その言葉に止められた思いを理解してしまって。

固まつていたからだね。僕は全く気が付いていなかつた。先輩の顔が近づいてきていることに。

「あ…。」

気付いたときには先輩の顔はすぐそこであつて。

零になつた。

そしてすぐに離れていつた。

「本当は舌もいれたい」とこりだつたがこれぐらうにしておへよ。」

「…先輩。」

「じゃあな、後輩。巫女娘と仲良くな。」

そのまま出でここうとする先輩。僕はその姿に何か言つべきか迷つたが、結局こいつ言つことにした。

「先輩。」

「何だ、後輩？」

「愛用しますね、この湯飲み。」

「ふつ、あたり前だ。この私が選んだのだからな。大事に使つてくれたまえ。」

届いたプレゼント群の場合

「これは…『深螺とアリスとサリーのか』。一まとめで来たんだ。」

中身は『神無ブランド謹製、厄払いクリスマスケーキ』と『何かの骨』と『猫のパーツ全集』。

「クリスマスケーキはこの際置いとくとして。神無ブランドって何さ?つて話だけど。よく送つてくる間に崩れなかつたなつて話もあるけど。で、この骨は何?そしてサリーは趣味全開すぎるでしょ。」

「…手紙か。」

『クリスマスケーキは一人で食べないと効果がないので気を付けて

ください。』

『それはトナカイの骨だ。好きに使うといい。』

『鏡花もこれでは非猫好きに。』

「…色々と言いたい」とはあるけど、いいか。メリークリスマス、三人とも。』

「次は…綾か。」

中身は『ウサギの書いてある可愛い小物入れ』だった。

「嬉しいんだけど…いつ使えと?…こんなの置いてあつた日には鈴音に何されるかわかつたもんじゃないよね。…手紙は…あつた。』

『メリークリスマス。使つてくれたうれしいかな。』

「…頑張るよ、綾。使つたために。メリークリスマス。」

「次は…傘か。」

中身は…『何かの薬』。

「…まさか…これは…。」

『恥ずかしかつたけど、鈴音さんのために買つてきました。気を付けなきやだめだよ、お兄ちゃん。』

「…やつぱりか…。なあ、傘。鈴音との交際を応援してくれるのはいいんだけど…。まあ、文句は今度会つたときにでも言おつ。メ

リークリスマス。」

「そりいえば陽慈からは…来ないかもな。またあの娘に振り回されてるんだろうな。…陽慈にも春が来たみたいで良かつた良かつた。

「…メリークリスマス。」

- 神無鈴音の場合 -

「へー。こんなオシャレなフランス料理のお店が近くにあったのね。」

「気に入つていただけたようで何より。じゃあ、メリークリスマス。」

「メリークリスマス。」

キンッ、とグラスが音をたてる。…未成年だから中身はただのノンアル「ールカクテルですが。それから一人でフルコースを堪能した。…下見に一度来ているからこれで一度目なのだけど、このお店は本当においしい。そして値段もそれほど高くない。実に素晴らしい。

「プレゼント交換タイム。」

「わー。」

どう見てもバカップルですね、ええ。

「まずは茧から。」

「はい。」

「…綺麗ね。」

僕から鈴音へのプレゼントはネックレス。…奮発して結構高いの買いました。いやらしく話ですが。

「どうかな？」

「…付けてくれる？」

「かしこまつました、お嬢様。…つと。」こんな感じかな。どう?」

鏡を取り出し確認する鈴音。…それにしても…。

「ありがと、強一いつ強へ・どうしたの?」

「今日の鈴音は一段と可愛いな、と。」

「な、。」

「へ・どうしたの鈴音?」

「…強も今日は一段と格好いいわよ。」

「ありがと、鈴音。さて、次は鈴音の番だよ。」

「私からのプレゼントは…はー。」

「これ…もしかして。」

「頑張つたでしょ。」

鈴音からのプレゼントは『手編みのマフラー』でした。

「うん、頑張つたと思うし嬉しこそ…長くない?」

「強ちよつといつひ来て。…ああ、やつぱりいこや。それよりも先に会計すませぢやいましょ。」

「へ・よく分からなこけど、とつあえず会計すませてくわね。」

サッサとお金払い外に出る。外は一〇度からしく凍えるよつた寒さだ。

「で、鈴音。わっさの続きだけ。」

「…」のマフラーを、ね、こいつ使つのよ。」

と言つて鈴音は自分の首と僕の首にマフラーを巻き始めた。

「…なるほど。」

「ど、どうかな？」

そつ尋ねてくる鈴音は肩が触れるほどとの距離にいる。

「あつたかいね、これ。鈴音の温かさかな？」

「…えへへ。」

「ちょっと鈴音！？密着しちゃうで歩きこくいんだけだ。」

「だつて寒いんだもーん。」

「…やれやれ。」

「あー見て、蚩一雪だよー。」

「…今年はホワイトクリスマスか。」

一人で近くにあつたベンチに座りしづらへ雪を眺める。

そして、二つの影が一つになつた。

「…つはは。」

「…えへへ。」

「あ、そうだ鈴音。」の後じりすみ。

「こ、この後つて…。」

「いや、そんないい反応されるとは思わなかつたんだけど。」

「…不束者ですが、よろしくお願ひします。」

「その台詞はこの場面でいうことかなー？つて、待つて鈴音ーそんな引っ張らないでーく、首がしめるからー。」

…」の後にこじまませんが、一つだけ言つておへと、僕のフレ

ゼントが役立ちました。

クリスマスですから クリスマス企画（後書き）

…やつぱり詰め込みすぎでしたかね。やや反省。

感想、お待ちしています。

カップリング、シチューハーション希望がありましたら、感想におねがいします。

次回こそ蜜×深螺です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1749p/>

マテリアルゴーストS

2010年12月26日11時26分発行